

令和8年度 都市経済常任委員会行政視察報告書

1 参加委員

(委員長) 水本定弘 (委員) 杉本啓子 (委員) 花田慎 (委員) 藤本恵祐
(委員) 菊池雅介 (委員) 加藤大嗣 (オンライン参加)

2 視察日時

令和8年4月21日(火曜日) 13時00分から14時30分まで

3 視察先

徳島県鳴門市

4 視察事項

(1) エコニックガーデニングによる地元企業の成長支援と地域経済活性化の取組について

5 視察概要

	(担当 杉本 啓子)
視察先選定理由	外部誘致に頼らず地元中小企業を育成・支援するエコニックガーデニングの先進地であり、伴走型の企業支援やその推進体制等について調査研究し、当委員会の政策提言に生かすため視察先に選定した。
内 容 ・事業概要 ・効果、推移 ・課題 ・今後の方向性	1. 事業概要 (担当課：産業振興部商工政策課) ・エコニックガーデニングは、外部からの企業誘致ではなく、地元の中小企業を「植物」、地域環境を「庭」に見立て、産・学・公・民・金が連携して地元の中 小企業を育てることで地域経済の活性化(雇用・税収増)を目指す経済政策であ る。1980年代後半に米コロラド州リトルトン市で発祥した。 ・鳴門市は平成24年度にエコニックガーデニングを導入。導入にあたっては、 拓殖大学・山本尚史教授の助言で政策研究を行った。 ・平成28年に「中小企業振興基本条例」を制定。政策や事業を進めるための理解 や「連携・協力」が進めやすいこと、予算確保による積極的な展開により、企業 も支援機関から支援策を受けられる仕組みとなっている。同時に企業1,400社 へのアンケートに加え、平成24年度からは年間100社を目標とした企業訪問を 実施している。二人体制で企業の状況や経営課題の把握、支援施策の紹介など を行い、現在も継続して実施している大事な取組。100社訪問することで、アン ケートだけでは聞けない本音で話ることができる信頼関係を作っている。 ・「中小企業振興基本条例」の制定を契機として、「鳴門市がんばる中小企業応援パ ッケージ事業」として補助制度を創設。平成28年度から令和6年度までの9年

間で 103 件を支援してきた（事業拡大、創業、販路開拓、知的財産取得への支援）。

2. 効果、推移

- ・平成 24 年度からエコノミックガーデニングに取り組んだ 10 年の間で、新型コロナウイルス感染症、物価高騰、原油等エネルギー 価格高騰、円安の進行など社会・経済情勢の変化が大きく見られたが、変化に対応した取組として、「市外からビジネスを呼び込む」という新たな施策にチャレンジしている。

(1) 「サテライトオフィス」の誘致

- ・都市部企業と地元企業のビジネスマッチングによる誘致
- ・専用 web サイトの開設（45 社を紹介し、地元企業から「売上増につながった」との声もあがっている）

(2) 「スタートアップ創出」

- ・鳴門市はスタートアップ企業にフレンドリーなまちとして支援体制を構築
- ・都市部スタートアップ企業のサテライトオフィスを誘致
- ・「子育て」「教育」「観光」「農業」をテーマに、スタートアップ企業とのマッチング
- ・市内でのスタートアップを「なるスタ」として市が認定

(3) 移住起業アカデミー「NARUTO BOOT CAMP」

- ・東京などと比べ、物価・コスト安、ライバルが少ない、行列・通勤ラッシュがない、地方独自の補助金などの利点
- ・「鳴門」を舞台に、ゼロイチの新しいビジネスや、地域資源・地域課題を活用したビジネスを創出する＝スタートアップ・社会起業家の育成
- ・起業希望者 30 人から 6 人をプレゼンで選考し、鳴門で短期起業合宿（キャンプ）を実施。これまでに 1 名が鳴門への「移住起業」を実現、2 名が市内で拠点を整備しており、ほか数名が検討中だという。

3. 課題

- ・鳴門市ではエコノミックガーデニングを 10 年以上展開しているが、「税込額のビフォー・アフター」などの効果までは把握できてないという。また数字も現時点では持ち合わせていない。
- ・議会から KPI への質問は出ている。成果は感触としてはあるが、KPI としての具体的な数値化は難しいという。

4. 今後の方向性

- ・少子高齢化による人口減少と、大学・就職を機に関西など経済圏の大きい所に出て行ってしまいが課題。数年前より出生数は少ないが、出が止まって戻ってくる人数が微増している。「なるとまるごと子育て応援パッケージ」などを通じて

	<p>若い世代が鳴門市とつながっていけるよう、市として取組を推進したいという思いがある。また鳴門市は関西圏からの交通アクセスが良く、観光などの資源を持ち合わせており、ふるさと住民制度で鳴門市はモデル地区に選ばれている。</p>
<p>考 察</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本市との比較 ・本市への事業導入の可能性 ・今後の検討内容 	<ul style="list-style-type: none"> ・鳴門市の人口は5万1,050人と茅ヶ崎市の約5分の1、面積は135.66㎢と茅ヶ崎市と比較して4倍近く大きな都市である。 ・鳴門のうず潮と鳴門のタイ、わかめなどの魚介類、なると金とき、レンコン、なし、大根などが特産物。 ・大塚製薬工場など大塚グループが立地し、大塚製薬が開館した大塚国際美術館、ベートーベン第九がアジアで初めて演奏されたドイツ館、四国八十八ヶ所巡礼の1番・2番霊場など観光資源は豊富。令和4年にオープンした道の駅「くるくるなると」の令和7年度来場者は150万人（令和7年度）を突破している。 ・瀬戸内海に面した過ごしやすい気候で、土地は山林が市面積の半分近くを占め、次いで田畑、宅地の順。出生数の減と大学・就職を機に関西圏に出ていくなど生産人口が減少。 ・一方で、茅ヶ崎市は市外の高校や大学、企業に通うためのベッドタウン構造で、子育て世代の流入も多い。市面積は狭いため人口密度は県内でトップクラスの住宅過密地で、中小企業（特に製造業や法人）が少ない。市の特色としては、鳴門市と茅ヶ崎市は正反対である。 ・「中小企業振興基本条例」を制定するのは、本市では住民の合意形成は難しい土地柄だと考える。すでに職を持つ人が多いことから市内ですらに起業するのではなく、休息や遊び、憩い、マリンスポーツ等がメインで「勤」より「遊」となり、市内で求められるのは医療や福祉、保育、教育の従事者である。
<p>備 考</p>	<p>参考資料</p> <p>(1)「エコミックガーデン鳴門の取り組みについて」（鳴門市産業振興部商工政策課）</p>